

元來冷水摩擦は荒療治であるから幼稚園児には斷

じて行つてならないのであります。

幼稚園日記(一)

クリーン、ハーデイ女史著
田中 生 抄 譯

一九〇六年十一月——エヌ、セーグニア幼稚園
は三人の子供を收容して開園しました。子供はも
う一人多く来る筈でしたが其母親が開園の日取を
間違へたので見えませんでした。私は第一木曜日
といふべきを次の木曜日と言つて了つたのです。

三人の内二人は初對面を平氣でやつてのける極
く氣の軽い子でした——おしよべり 惻巧で親しみ易くて饒舌
で完く遠慮なしでした。

子供等の言葉には随分面白いのがありました。

一番年長の子が今自分達が絲を通してゐる玉は自
分のものになるのでなくて皆先生のものになつて
しまふんだといふ事を他の二人に話して居ました。

三人は私の名を呼ぶのを非常にむづかしがりま

した。そして最初の一日は私は「小母さん」で通
されて了ひました。翌日も「いつもあな貴君の名を忘
れちまつて」といふ謝言ことわり付きで矢張「小母さん」
と呼ばれました。

此の幼稚園はボール教會所屬の或る小さい會堂
内に設けられてあります、教會には金曜日と日曜
日に祈禱會が行はれて。幼稚園用にする時は祭壇
の前へ幕を張つて、そして腰掛、椅子、跪拜筵等
はすべて見えない所へ押込まれて了ふのです。

子供等は此所こゝを私の住居だと思つて居ます。子
供等は大概一つの室とそれから離れて少し小さい
室との二間の家か又は一つの室と寢室とを備へた
家か又は一つの室しかないのでも家と稱してゐる

所から通つて來るのです。

或日一番伶俐な子供が室内を注意深く見廻してゐましたが懸て

「ハーデイさんの寢床は何處にあるんだらう——
ハーデイさんは夜何處へ寝るのだらう」と尋ねました。

或日私が室の内△でグル／＼めぐりをしませうといふと

「これは家よ、大きな家だわ」

といつて私が室△といつたを訂正した子供がありません。

又ある時、床フロアの掃除に就て話してゐると、子供は床フロアと花フローとを感か違ちがひして

「花ぢやない、床」

といつて笑ひました。

金曜日△に、子供は土曜日△には來るのではありませんと話されたのに、次の月曜日△には

「私達此所こゝへ來たわ、けど貴君あなたは居ゐなかつたの

ね、何處へ行つてゐて？」

と不平らしく云つたりしました。

其の次の金曜日△に、土曜日△には留守にしますと話して聞かせますと。

「何處へ行くの」

「遠くにある私のお家へ」

「それぢや扉を開けて置いて頂戴、私達來て貴君あなたのおかへりを待つてます」

一九〇七年一月——初め二三週の間、私は自分の言を實行させるのに非常に骨が折れました。

極く簡単な「お立ちなさい」「お座りなさい」といふ様な命令も一々説明しくなてはならなかつたのです。思ふに子供等は動詞を用ゐて物事を吩咐けられた事は今までに無かつたのでしよう。又私の言語が子供にとつて不思議に思へたのかも知れません。私の方でも子供等の言語にはまつたく閉口させられて了ふ事が幾度もありました。

多くの日常の言語が非常に異つて話されました。初めの内はよく「最早お辨當おんべんを食べる時間

すか」といふ質問が屢々繰返されました、「まだです」と、答へると頭株のマガイは他の者に分る様にそれを説明してやるのが常でした。

貧乏人の子供と上流の子供とは言葉使ひが非常に違ひます。幼稚園へ来る様な小さい子供はまだホンの少ししか言葉数を知らず、そして新しい言葉を覚えるのは非常に困難な事です。たゞ發音するだけでもかなり骨が折れるのです。

子供等に新語を教へ込まうとすると、子供等は屢々その語の代りに自分が前から知つてゐる語で、意味などには頓着なしに發音のいくらか似てゐるをもつて來て發音します。

例へば私が教へたクリスマスの歌の中に「ひととせにこよなくうれしき日」といふ句がありました。此のイア(年)といふのが子供には發音が出来ない。或る子供はそれをステアと發音しました。

言葉が分らないばかりでなく子供は一般にまだ經驗が淺いので話をしてやるのは一大難事です。

目下收容してゐる八名の中で、たつた、二人が汽車へ乗つた記憶があり、海を見たものと田舎へ行つたものは一人もなく。誕生日といふことを知つて居る者は一人もありませんでした。

又子供等の母親も大抵その子の生年月日を判然いふには出産證明書を見なければ分らない向が多いのです。

お馬と鳩ぼつぼとわん／＼と兎馬が子供の知つてゐる限りの動物です。そして羊、山羊、狐、栗鼠、兎、豚鼠てんげんねづみの繪は皆、わん／＼だと言はれて了ふ。庭園用修道輪ガーデンローラーは自轉車だの茶壺だのと言はれる。但し子供等は家庭的本能は強くて。外套室の自分の掛釘とテーブルの席次とを苦もなく覺へて了ふますし、僅か三才の小さい子供でも一人でどん／＼お使に行きます。

西區(上流社會の家多し)の奥様連は此の幼稚園の子供の獨立的なを見て驚くのが常です。

四才三ヶ月のいたづら者のおちよびさんが三才

六ヶ月になる相棒と一緒になつて母の室（母親は外へ仕事に出るので一日鍵が掛けてある）へ侵入して、入口の戸に楔子を塞つて置いてオートミール砂糖の食卓を開いて、それから瓦斯に点火してお茶を入れたといふ様なこともありました。

全體此の邊の母親は自分が饑えない範圍で子供に何でも惜氣なく呉れて了ふ風があります。

或日私がサンドキツチを食べてゐると戸を叩いて子供が來ました、

「私達、先生の側へ來たくなつたので來たのです、ホンの少しの間此所こゝにゐるだけ」

私は疲れてゐました、併し如何して子供達の入つて來るのを拒こはめましょう。

サンドキツチは忽ち子供の好奇心の焦點になつて細かに研究されました。ビートルートのことを「これはジャムだと或る子が言ひ、果糖フクトは糖蜜と呼べました。その翌日マギイは言ひました。

「私阿母さんに先生はお晝にお辨當ばかり食べ

てお茶を上りませんと話したら阿母さんは先生にお茶を差上げますから夜私の家へお出下さる様にと言ひました」

貧民窟では食事イールをするといつても主なる食物といつたらお茶、濃いお茶位なものです。一般に食事に使ふ所の麩包ほんの薄片やバター麩包やジャム麩包などはないのです。食物は些ちひとも規定きまりが無く與へられ、子供等は何か欲しくなると欲しいと云ふ、そして若し何か有合せれば何時いつでもおかまひなしに與へられるのです。

或る母親が自分の子供の病氣が全快して食慾が進むことを喜んで話して

「食物たべものは決してあの子の手を離れたことがありません」

といつたことがあります。詰り何時も食物を手にかけてゐてそれを嚙つてゐるといふ意味なのです。

もう少し注意深い母親達は其子供に御馳走としてスープを與へます。併しブツディングは彼等

には贅澤すぎるのです。

或日カーンゲートを上つてゐた時、同情心の深いマギイは私に

「何處へいらつしやるところ」

と尋ねました。

「御馳走を食べに家へ歸るところです」

同じ日の後刻にマギイと又會つたら

「御馳走を上つて來ましたか」

「ええ」

「何を上りました」

「お魚」

「私も時によると夕食の時（母親が歸つて來た時食べるので一日中一番量の多い食事）お魚を食べることがあるの、お魚と一緒にお茶も召上つて」

「いゝえ」

「自家でも時によるとお茶が切れてゐて、それを買ふお金がないとお魚だけでお茶は飲まない

のよ」

と云ひました。貴君ばかり貧乏なんぢやないといふ意味を汲ませるつもりらしいのです。

私は子供達が私を自分達の仲間の一人の様に思つてゐるのが嬉しくなります。

或日私が新調の外衣を着て行くと

「誰がそれを呉れて」

と子供が云ひました。何でも目新しい物を見ると我慢しきれなくなつてよく這麼事を訊きます。

「私が拵へたのです」

「嘘！」

「いゝえ、本當に私が拵へたのです」

「ぢや何で拵へたの、貴君の阿母さんのスカートで？」（外衣の物は淡青の織物であつた、而かも母は寡婦でした）

カーンゲートでは滅多に新しいもので衣服を作
りません、大概は古手で買ふのです。